

## 生涯と舞踊－アジアの民俗舞踊の伝承をめぐる

宮尾慈良

## I

今回のテーマ「生涯と舞踊」にそって、アジア各地の民族における舞踊を生業教育としてどのようにとらえ、伝承していくかを考えてみた。この生涯教育 (long life education) というものの意味は継続教育 (continuing education) と考えておきたい。すなわち、一般の人が大学の教育をすぎ、子供の教育を終えた30代、40代、50代になっても再び大学や教育機関で学ぶこととして、一生涯のなかで、いくつになっても学び、広く教育という視点から舞踊を取り上げなければならない。

ところで、これまで報告された日本舞踊や能、狂言において、この生涯 (教育) という言葉の定義あるいはアグリーメント (合意、意見の同意) が明確さをもたなかったため、舞踊の伝承の仕方またはその方法の発表になってしまい、比較研究ができなかったことは残念である。わたくしは、舞踊が人々の一生涯のなかで、特別な環境や条件をもたなくても、いつでも舞踊を学ぶことができる人々の生涯教育に役することを考えたとき、アジア各地の舞踊がどのように教育され、伝承されているかをみてテーマを絞ってみることにした。

アジア舞踊の伝承をみたとき、それは日本と同じく世襲、一般に分けることができる。世襲として舞踊を伝承するには、どうしても伝承しなければならないという世襲的といえる特別な条件をもたうので、当然ながら早期－5歳あるいは6歳頃－からの舞踊教育がなされている。これは身体的に柔軟なことがいえるようである。舞踊における芸の伝承は、宮廷、代々から伝える家系、あるいは師匠 (インドのグルなど) から弟子へがある。さらに各民族における舞踊は、きわめて社会的・集団的で儀式的な性格をもっていることも考えると、舞踊を特別に伝承するものが世襲的に伝承されているといえる。これも一般とは違う伝承といえよう。

しかし、生涯教育と結びつく伝承は、世襲の伝承ではなく一般における舞踊の伝承である。子供を育てた母親や余暇をもてる人々が、たとえば英会話やテニス、ゴルフに気が向くのは、意識下においては自分の知識、教養、文化として行うのであろう。ところが、舞踊を学ぶことはどうであろう。そこには年齢的に若いという条件または年を過ぎていくというものが妨げになっていけば生涯 (継続) 教育とはいえない。すなわち、誰でもが舞踊をする喜び、楽しみを知り、そのことが人間

として心身ともに大切なことであることを教えるのが、わたくしたちの仕事ではないかと思うからである。これは舞踊に対して、いままでの人々がどのような認識を持っているのかどうか、あらためて考えなければならない。

ここでは外国において舞踊への認識の違いを述べなくてはならないが、焦点を生業教育としてあてた場合、どのようにアジアでは受け止められているのかを、実際に外国で学んできた舞踊家と私がアジア各地でみてきた印象をもとに考えを提言することにしたい。

## II

アジア各地の舞踊を伝承することに関して、生涯教育として考えたいことは、(1) 舞踊を学ぶとは、アジアの人々にとってどのような意味をいうのか。(2) なぜアジアの舞踊を学び、伝承しているのかをデモンストレーションをしながら教授してほしいことにある。

今回は時間の都合上、発表された方は4人 (このほかタイ、ネパール、インドネシアのジャワ、バリなどに学んだ舞踊家もいました) だが、これらから日本におけるアジア舞踊の生涯教育あるいは継続教育として舞踊の伝承方法の可能性を考えてみようとするにある。

- a) 祖国を離れた外国人が、自国の文化を舞踊という形で伝承していく、つまり異文化のなかでの民族文化の伝承を韓国の仮面舞踊劇 (タルチュム) を通じて日本人 (当日の出演者) に教えている朴貞子さんに発表してもらった。これから国際化する日本の文化として舞踊をいかに伝承するか考えさせられる。
- b) 日本人として日本民族の舞踊を研究し、実践している黛節子さんは、日本の舞踊の源流として中国の雲南地方の現地に出掛け、自ら身体をもって舞踊を伝承しようとする。これから日本の舞踊家が日本民族の舞踊 (日本舞踊とは違う) を考えるときに同じような伝承のプロセスをとる示唆を示した。
- c) インド舞踊のカタックを伝承する立田信子さんは、ヨガの静なるものの具現化である動なるものの形としての舞踊をカタックにもとめ、現地での2年あまりの研究を通して、個人的な勉強の延長として舞踊を精神的な形の伝承を教えてください。これからの人々が自分の教養文化として舞踊を学ぶことの例を示してくれた。
- d) 南インドの舞踊の一つであるカターカリを伝

承するバーバリッチ順子さんは、アメリカに十年近く住み、アメリカの大学にて、アジア舞踊を学んだ。外国においてアジアの舞踊とは何か、どうして学ぶのか、そしてどのように伝承されているかを発表してもらった。将来、日本にてアジアの舞踊という授業が大学にて開講されるならば、いったい何をどのようなプロセスをもって伝承していくかにおいて、教えられることが多かった。

以上、アジア舞踊における生涯教育について簡単に報告を述べたが、日本人としてアジア舞踊を伝承する心のすばらしさを各発表者が教えてくれたことは、ひじょうに嬉しく思う。また、いま一度舞踊と生涯教育について考える機会が持たれることを願っている。

\*1988年度春季第25回舞踊学会  
『舞踊学』第11-2より転載